

小説 浅草案内

半村良

龍山

雷門



新潮



小説 浅草案内

半村良

新潮社

しょうせつ あさくさあんない
小説 浅草案内

著者 半村 良 (はんむらりょう)

一九八八年一〇月一五日 印刷

一九八八年一〇月二〇日 発行

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

印刷所 東洋印刷株式会社 製本所 株式会社大進堂

定価 一二〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ryo Hanmura 1988, Printed in Japan

ISBN4-10-317504-4 C0093

小説 浅草案内 もくじ

第一話 横丁の猫

7

第二話 鳩まみれ

31

第三話 朝から晩まで

53

第四話 つくしんぼ

73

第五話 一文いちもんの酔よ

99

第六話 おたんこなす

123

第七話 冗談ぬき

147

第八話 寒い仲

171

第九話 国木屋

195

第十話 へろへろ

217

第十一話 日和下駄

239

第十二話 祭りのあと

263

小説 浅草案内

装画
酒井不二雄

第一話
横丁の猫

夜中のカラオケの音に用心して住む場所を探したおかげで、その小さなマンションの五階は案外静かだった。

「お前はもともと下町の人間なんだし、だいいち世田谷なんぞに住む柄じゃねえんだ。どうせ東京へ戻ってくるんなら下町にしろ」

旧友の一人が酔っ払って、からむようにそう言ったとき、私はなるほどそれともうだと思った。思ったとたんすぐ動いてしまうのが思慮のたりないいつもの癖で、考えがあさはかなところは行動力で補っていると、自分では勝手にそう思っている。

で、翌るあさ泊まっている新宿のヒルトン・ホテルをたびだし、地下鉄に乗って浅草へ行ってしまったのだ。

仲見世には平尾がいる。親の代からの鞆屋だ。昔の仲間はずまいが変わったり、会社がどこにあるか判らなくなったりしているが、中にはひとつところに何十年も同じ商売を続けていて、会おうと思えばいつでも会える奴も何人かいる。

平尾がその一人で、彼のおやじさんに玉撞きで挑戦したことが何度かある。今から三十年も前

のことだ。

四つ玉で手合せをしてみると、これがとんでもない名手で、私は手もなくひねられてしまった。そのおやじもとうに亡くなって、今は息子の平尾英介が仲見世の鞆屋の旦那だ。

「よう。また現われたな」

雷門を入れて、敷石をとりかえたので昔よりは随分歩き易くなった仲見世の、だいぶ奥へ行つたあたりの左側にある鞆屋の店先で、平尾英介は私の顔をみるなりそう言った。

「女物ばかりじゃないか」

私は狭い店の中を見まわして言う。久しぶりの挨拶は抜きだ。店の中にはハンドバッグやポシエットのたぐいがびつしりと並べられ、壁など見えはしない。

「姉さんのほうに置いてある」

平尾は店を出て歩きはじめそんな気配を示した。私が鞆を買いに来たとも思つたのだろうか。平尾の姉さんの家が、もう少し宝蔵門寄りの右側でやはり鞆屋をやっている。

「そうじゃない。家を探しに来た」

平尾が目丸くした。子供のころから、ちよつとおとなびた感じのする美男だった。だから若旦那時代は、その若旦那という役どころが滅法似合つたが、五十を過ぎた今ではいい男の分だけ少し軽めである。でも、軽いのが浅草つ児の特徴だから、それはそれで結構な風情だ。

「しばらく静かにしてらなと思つたら、やつぱりそんなことか」

平尾はそう言うと、小さな手提鞆を小脇にかかえ、

「フアニーへ行こう」

と、店の横の通路を抜けて裏の通りへ出て行った。

薄曇りの冷たい風が吹く日で、雷門から一直線に並んだ仲見世の赤い色が妙に沈みこんで、不景気な感じだった。

伝法院でんぽういん通りもまださむざむとした感じだ。

「男がそういううちっちゃい靴を持つのはやっつてんな。なんて言うんだい」

「メンズバッグ……セカンドバッグかな」

靴屋のくせに平尾の答は頼りない。次のちん横通りの角に、表側がガラスばりの喫茶店があった。平尾はその店のドアをあける。

「こんな店、あったかな。憶おぼえてねえや」

中へ入って私は店内をみまわした。まだ新しい感じがする。

「コーヒー頂戴」

平尾はカウンターのうなずにいる、マスターらしい男に言った。

「俺もおんなじ」

私はバーバリーのレインコートを脱ぎながら言った。注文はコーヒー二つだ。マスターはたしかに頷うなずいている。しかし平尾ははつきり、コーヒー頂戴、と言った。このあたりでは、ヒトシを混同したって昔から誰もなんとも言いはしない。

平尾……正確にはシラオと発音すべきなのだろうが、とにかくその旧友と向き合って坐り、ふ

と外を見ると「大黒家」の看板がうすぼんやりと光っている。看板なんか浅草あたりでもとうにセンサーを使つてついたり消したりしているんだらう。曇っているから三時をちょっと過ぎたくらいで、もう灯り^{あか}が入つてしまつたのだ。

「大黒家さん、相変わらず繁昌してるのかい」

「そりやもう」

平尾は微笑した。

「がんばってるよ。でもな、こないださ、グルメつて奴がいるだろ。食通だなんて自分で言い触らしてる奴だよ」

「ああ、近ごろ多いようだな」

「そういう評論家に、雑誌でクソミソに書かれちゃつたんだよ。若旦那がカンカンになつてた」
聞いて私もムカツとした。「大黒家」の天井なんて、昔からちつとも変わつてやしない。変えないように努力してる店だ。昔つから下町みんなの店だつた。

「若旦那にそう言つとけよ。そんなの氣にすんなくて。俺たちがついてらあ」

最低、年に一回は平尾に会っている。その一回は大晦日^{おおみそか}から元旦にかけての夜中。つまり初詣^{はつしげ}のときだ。親の代から観音さまへ初詣をしないと縁起が悪いと思つてゐる。それがこの三年、初詣に来そびれた。北海道へ行つていたからだ。

「北海道に三年か……」

コーヒーが来て、平尾がコーシーをスプーンでかきまわしながら言う。

「三年だ」

「とどのつまり、か」

平尾はニヤリとしてみせる。

「気の弱り、さ」

「どこらへん……」

久しく忘れていた、下町の子同士の喋り方がはじまっていた。委細承知と面倒なことはみなのみこんで、会話が要点から要点へと飛躍する。

スポーツ中継風にくどく解説すればこうだ。

平尾とは最低、年に一度は会うと言った。しかし私の生活に波乱が起きると、ちよいちよい浅草へ顔を出すようになる。

浅草は私の気を安めてくれ、ゴタゴタの渦中にいる自分を、昔の子供の位置から眺めさせてくれる。そうすると、苦になっていたことが苦にならなくなり、欲しがっていたものが欲しくなくなる。

平尾はずっと以前から、私のそんなところに気付いているらしく、浅草へ頻繁に現われるようになる、何かあったのだと思うのだ。

それがまる三年、北海道へ行つて姿を見せず、突然戻ってきて家を探すと言う。お互い同級生だから年齢のことは判り切っていて、だからゴタゴタはもうおわりだろうと思ったのだ。

で、とどのつまりは浅草ぐらしか、とからかったのだ。

ふるさとへ まわる六部の 気の弱り

そんな句も、寄席の高座からの知識で共有している。だからさらりと聞き流し、浅草のどのへんに住む気だと尋ねたのだ。

「彦六さんみたいな長屋がいいな」

私は勝手なことを言った。

「そんなのねえよ」

案の定平尾は言下に否定する。

「二階だての長屋のまん中くらいでさ、軒先に、小説書きます、って札をぶらさげたい」

「永谷が廃業したんだ」

「富士通りのか」

その昔、みんなでちよつと遊んだ料亭だ。

「マンションにするって噂がある」

「いつでも……」

「まだ以前のまんま」

「それじゃ間に合わねえ」

「本気だな」

「うん」

「探しとく」